

# 和服の袖口合わせのための標付けと縫い方についての一考察

寺田 恭子・神田 和子

(昭和61年9月29日受理)

## A Consideration of Marking and Sewing for Fitting Kimono's Sodeguchi

Kyoko TERADA and Kazuko KANDA

(Received September 29, 1986)

### 緒 言

和服縫製という、熟練した技術や勘が必要とされており、数多くの指導書においても、経験的な数値は示されているが、なぜその寸法が必要かについての理由は記されていない。

従って今日のように経験のないものが、大学の被服科に入学し、被服平面構成を履修することは、その指導に時間的余裕もなく、極めて困難な状況である。

そこで本報では、和服の袖口合わせについて、標付け縫い方を理論的に解明し、初心者でも比較的容易に製作できる指針を示すと共に、実際に初心者を用いて製作し検討したので報告する。

### 袖口合わせのための標付けと縫い方

和服の袖口合わせは、表袖布に袖口布が平らになじむようにゆりみ量を十分考慮する必要がある。

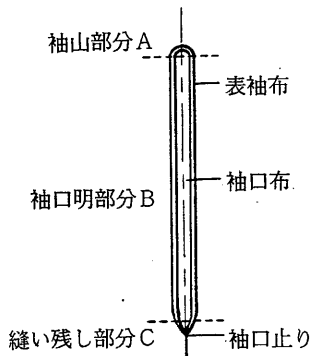


図1 袖口の分解図

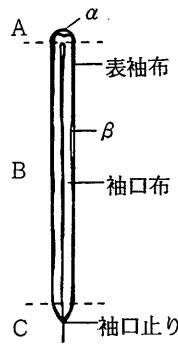


図2 表袖口に必要なα量・β量

袖口を袖山部分A、袖口明部分B、縫い残し部分Cに分解し、図1に示し、袖口布が平らになるためのゆりみ量を作図により算出する。また実際に縫製し、従来の方法と比較検討する。

### 1. ゆりみ量の算出方法

袖口合わせをするとき、表袖布と袖口布の袖口寸法を同寸にしたのでは、図2に示す通り一番内側の袖口布に袖山部分でα量、袖口明部分でβ量のゆりみを生じて、つり合いの良い袖口合わせはできない。表袖布に袖口布が平らになじむためには、表袖布に袖山部分Aでα量、袖口明部分Bでβ量のゆりみを加えればよい。

そこで表袖布のゆりみ量の算出方法の作図を、図3に示す。袖山部分Aは半円である。袖口の最も内側の袖口

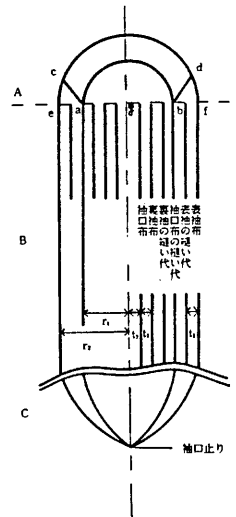


図3 ゆりみ量の算出方法

明の上端をgとすれば、g点は円の中心である。g点を通る直線上の袖口合わせ点をa, b, 袖口の最も外側をe, fとすれば、円弧efと袖口合わせ寸法円弧abの差の1/2寸法は各々ce, dfとなる。表袖布, 裏袖布, 袖口布の布の厚さを $t_1, t_2, t_3$ とすれば、円弧abは、(1)式より算出することができる。

$$r_1 = 2(t_2 + t_3)$$

$$\widehat{ab} = r_1 \pi \dots (1)$$

次に円弧efを(2)式により算出する。

$$r_2 = 2(t_1 + t_2 + t_3)$$

$$\widehat{ef} = r_2 \pi \dots (2)$$

袖山部分Aの表袖布に必要なゆり $\alpha$ 量を求めると、袖口の中心点gを0としたとき、裏袖布と袖口布の布の厚さから求めた、円弧abとすることができる。袖口明部分Bの $\beta$ 量は、表袖布と裏袖布および袖口布の布の厚さから求めた円弧efから、袖山部分のゆり $\alpha$ 量を引いた寸法で求めることができる。すなわちゆり $\beta$ 量は(3)

式により算出する。

$$\widehat{ce} + \widehat{df} = \widehat{ef} - \widehat{ab} \dots (3)$$

## 2. 標付け

1で算出された数値で標付けをしたものを図4に示す。袖口布の袖山部分Aの標付けは、予備実験によりこれ以下の寸法では容易にゆるみ量を入れることができないだけの縫い残し量を0.2cmと設定し、①の標を付ける。これに対して、表袖布の袖山部分Aの標付け①'は、(1)式で算出された数値の $\alpha/2$ 量に0.2cmを加えて標を付ける。次に縫い残し部分Cの寸法を予備実験より0.5cmと設定し、袖口布に、袖口寸法 $-(0.2\text{cm} + 0.5\text{cm})$ で袖口明部分Bの標②を付ける。②から0.5cm離し袖口止り③の標を付ける。これに対して、表袖布は(3)式から算出された数値の $\beta/2$ 量を加えて、袖口寸法 $+\beta/2 - (0.2\text{cm} + 0.5\text{cm})$ で②', さらに0.5cm離し③'の標を付ける。

各々付けられた標を合標とする。また袖口合わせの縫い代は0.7cmとする。尚、袖口布は標付けをする前に裏

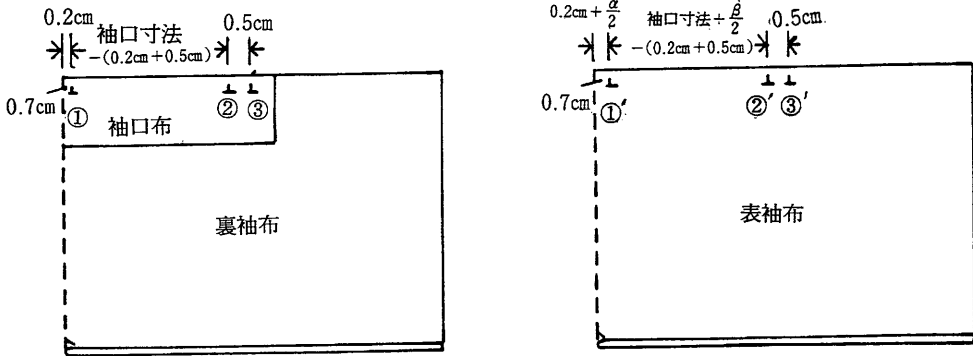


図4 標付け

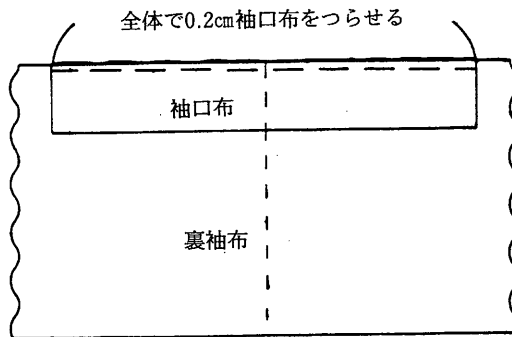


図5 袖口布のかけ方

袖布に縫い付けておく。袖口布の付け方は図5に示す通りである。

### 3. 縫い方

各々の合標を正確に合わせて、袖口明部分Bはゆるみ量を均等に入れ待ち針を打ち、②の間を縫う。袖山部分Aは図6に示す通り、糸は袖口布(裏袖)の方へ渡るように縫う。

### 実物製作方法

袖口合わせのための標付けと縫い方を理論的に解明した。この結果の確認を得るために、従来の方法と併せて実物製作を行う。試料布には地直しを行なった綿織物を用いた。表袖布は正花(花色もめん)、裏袖布、袖口布は新モスを選んだ。試料布の諸元は表1に示す通りである。今回は袖口寸法23cm、ふき寸法0.2cm、袖口合わせのきせ0.2cmと定めた。

表1 布の諸元

布名	材質	組織	厚さ (mm)	密度 (本/cm)	
				経	緯
正花 (花色もめん)	綿	平織	0.15	35	33
新モス (裏袖布)	綿	平織	0.24	29	28
新モス (袖口布)	綿	平織	0.24	30	25

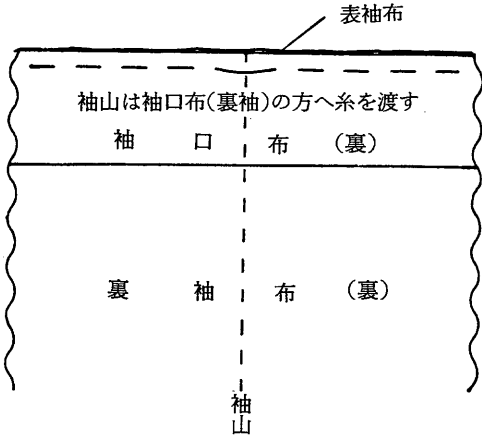


図6 袖山部分Aの縫い方

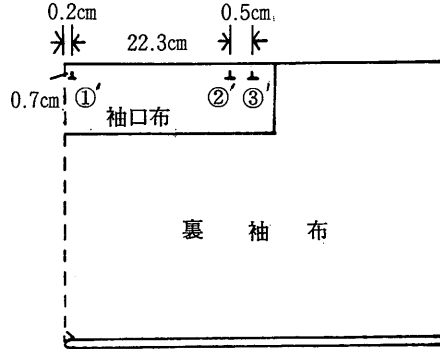
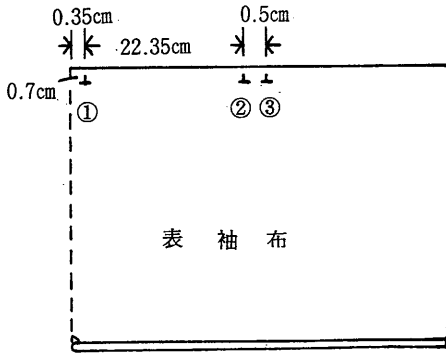


図7 方法1の標付け

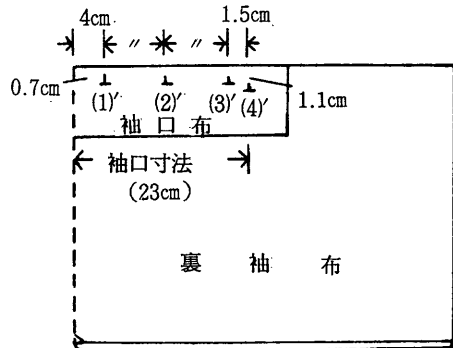
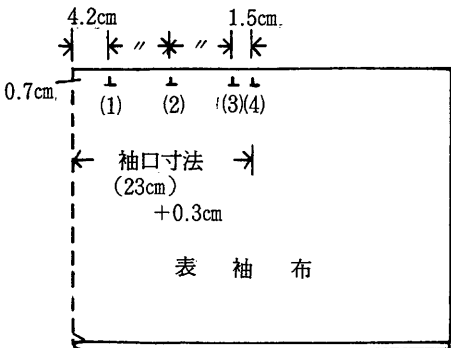


図8 方法2の標付け  
(281)

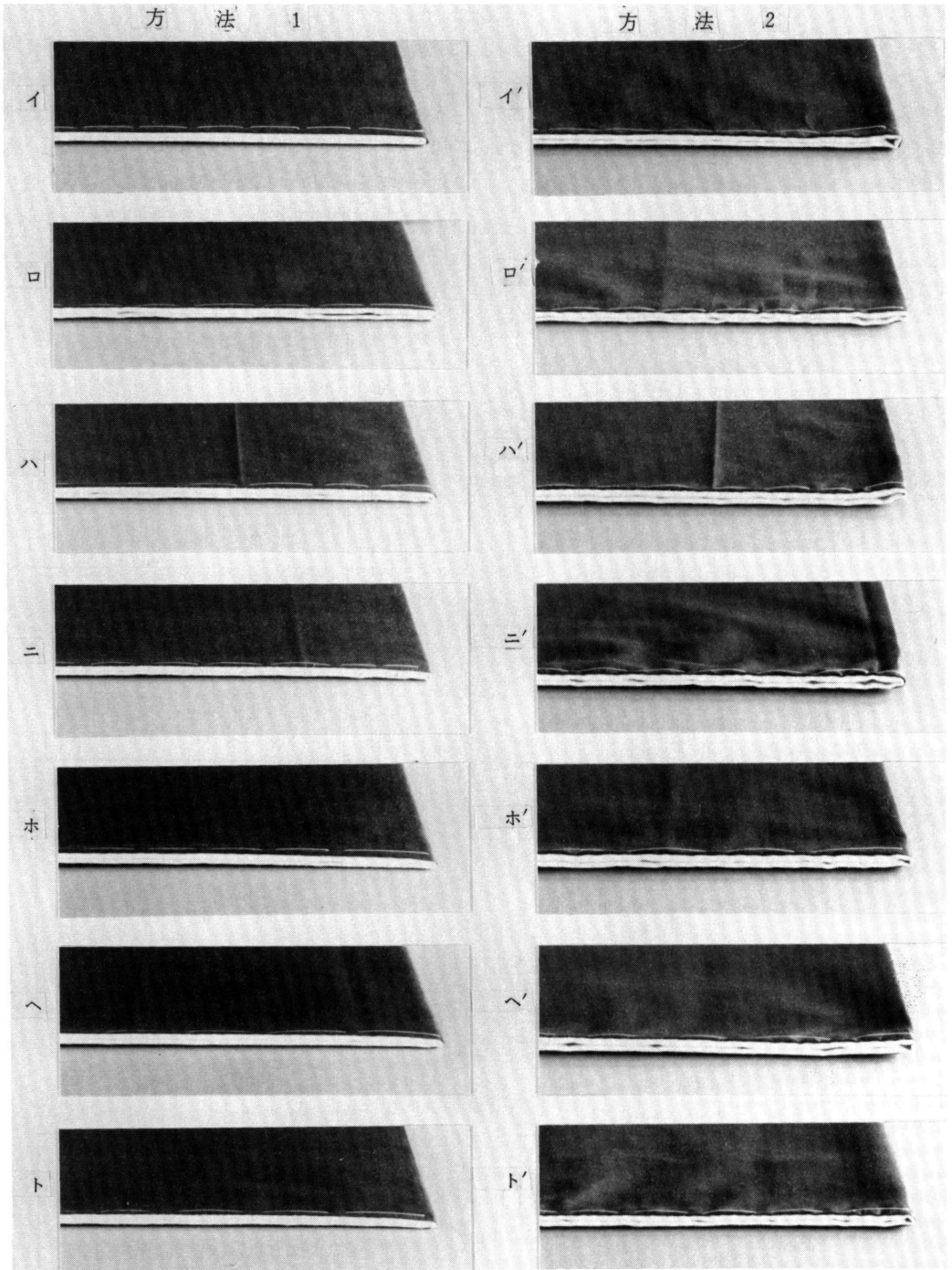


図9 実物製作による袖口合わせ

表袖布の標付けは、表袖布の布の厚さ0.15mm、裏袖布の布の厚さ0.24mm、袖口布の布の厚さ0.24mmであるから(1)式、(2)式、(3)式から各々のゆるみ $\alpha$ 量、 $\beta$ 量を算出すると、 $\alpha$ 量0.3cm、 $\beta$ 量0.1cmとなるから、袖山部分Aの①に $\alpha/2$ 量を加えて0.35cm、袖口明部分Bの②に $\beta/2$ 量を加えて22.35cmで標を付ける。縫い残し部分Cと袖口布の標付けは2で、また縫い方は3で説明した通りである。以上の方法で袖口合わせをしたものを方法1とし、その標付けを図7に示す。

また従来の方を選ぶために11冊の指導書<sup>1)~11)</sup>を調べたが、同じような数値が記されているので、この中から最も多く合標を付ける方法を選択し、方法2<sup>7)</sup>とした。

図8に示すように、表袖布は袖口寸法+0.3cmで袖口止り(4)の標を付ける。袖山から下(1)に4.2cm、袖口止りから1.5cm上に(3)の標、(1)と(3)の2等分点(2)の標を付ける。表袖布の袖口合わせ寸法は、(1)から(4)まで0.7cmとする。袖口布は袖口寸法23cmで袖口止りの標(4)'を付ける。袖山から下(1)'に4cm、袖口止りから1.5cm上に(3)'の標、(1)'と(3)'の2等分点(2)'の標を付ける。袖口合わせ寸法は、(1)'から(3)'まで0.7cm、(4)'で1.1cmとする。縫い方は各合標を合わせ、方法1のように袖口止りで縫い残しせず全部縫う。

### 結果考察

実物製作方法で示した寸法で、学部4年理科コース3名、短大2年被服コース3名、短大1年被服コース1名の計7名により製作したものを、図9に示す。方法1、2とも寸法を示して説明をしたため、指導者が手を加え

ることなく、容易に縫製することができた。全被験者とも方法1を先に製作し、続いて方法2を行なった。方法1で製作したものを試料イ、ロ、ハ、ニ、ホ、ヘ、ト。方法2で製作したものを試料イ'、ロ'、ハ'、ニ'、ホ'、ヘ'、ト'とした。袖口の袖山部分A、袖口明部分Bについて検討する。

袖山部分Aにおいては、方法1の試料ロ、ニ、ホ、ヘ、トは表袖布と袖口布のつり合いが良くとれているが、試料イ、ハでは表袖山に多少のゆるみがみられる。これに対し方法2では試料ロ'、ハ'、ニ'は比較的つり合いが良いが、他のイ'、ホ'、ヘ'、ト'は袖口布にたるみがみられる。

袖口明部分Bでは、方法1の全試料において表袖布のゆるみ量が一定に入り、袖口布もほぼ平らなつり合いである。試料ホでは袖口合わせの糸こきがやや悪いようである。方法2ではロ'、ハ'、ニ'、ホ'、ヘ'、ト'において、袖山に近い部分4cm位の間に袖口布にたるみがみられる。またロ'、ニ'、ヘ'、ト'は袖山部分から4cm位下がったところから下の部分に、表袖布に必要以上のゆるみがみとめられた。

縫い残し部分Cにおいては、図10に示す通り、方法1は袖口止りまできれいにふきが出た。方法2では袖口留め近くでふきが細くなり、特に前袖においてふきが中に入る傾向がみられた。

以上の結果から、袖山部分Aでは、表袖布に袖口布が平らなつり合いになるように袖口合わせをするためには、表袖山に裏袖布と袖口布との布の厚さから算出するゆるみ $\alpha$ 量を加えて合標を付け、このゆるみ量が他へ逃げな

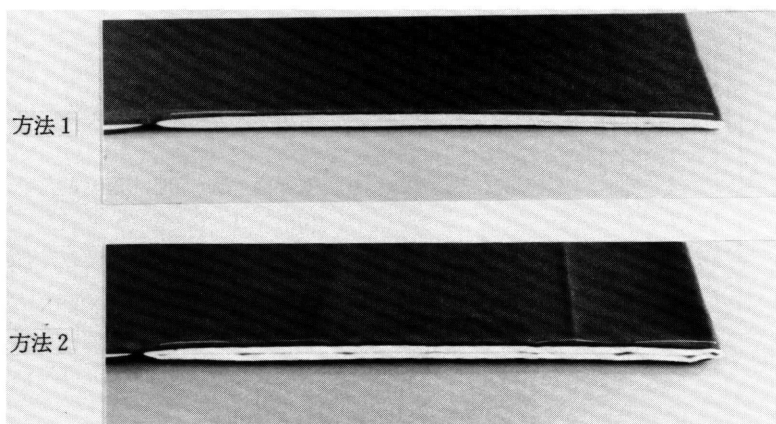


図10 袖口合わせと袖口留め

いように合標を正確に合わせ、縫合方法は裏袖側に糸が渡るようにすれば、初心者でも比較的容易に美しい袖山部分ができる。

袖口明部分Bの表袖布のゆるみ量は、表袖布、裏袖布、袖口布の布の厚さから算出された数値β量が適量であることが、2つの方法を比較して明確になった。また方法2で標付けの(1)と(3)、(1)'と(3)'の2等分点を標しているが(図8)、標付けの誤差も生じてか、試料すべてに均等なゆるみが入らず、部分的にゆるみ量がかたよって入るので、合標は必要最少限が望ましいようである。

縫い残し部分Cは、方法1、2とも四っ留めの位置および深さは同じであるが、方法1では0.5cm縫い残したため、四っ留めをした場合表袖布が少しつれかげんになり、袖口布がややいせ込まれ、袖口止りまで袖口ふきをきれいに出すことができる。方法2では袖口止りまで縫い合わせるので、四っ留めの際布の自由度が小さくなるので、留め近くで袖口ふきが細くなり、特に前袖においてふきが入りやすくなる。四っ留めに関しては今後の検討課題とする。

### 要 約

和服の袖口合わせのための標付けと縫い方を初心者でも容易に理解できる方法を理論的に解明し、さらに従来の方法と併せて被験者7名を用いて製作し、比較検討して次のような結果が得られた。

1. 袖山部分Aのゆるみ量は、裏袖布と袖口布の布の厚さから、 $\widehat{ab}=r_1\pi$ で算出される。

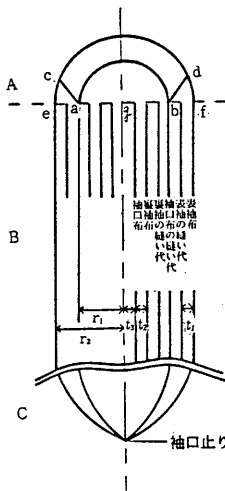


図11 ゆるみ量の算出方法

2. 袖口明部分Bのゆるみ量は、表袖布と裏袖布および袖口布の布の厚さから、 $\widehat{ce}+\widehat{df}=\widehat{ef}+\widehat{ab}$ により算出される。
3. 標の数は多いほど誤差と煩雑さを生じるため、必要最少限にすることが望ましい。
4. 縫い方は各部分にゆるみ量を確実に入れるために、合標を正確に付け、確実に待ち針を打つこと。また袖山部分は糸のつれを防ぐために、袖口布(裏袖)の方へ糸が渡るようにする。
5. 袖口止りから0.5cm縫い残すことにより、縫い残し部分Cの布に融通をもたせることができる。すなわち、袖口の留めをすることによりこの部分の表袖布が少しつれかげんになり、袖口布がややいせ込まれ、袖口止りまで袖口ふきをきれいにすることができる。

終わりに、本研究に御協力下さった学生諸氏に感謝致します。

### 参考文献

- 1) 奈良女子高等師範学校裁縫研究会：最新裁縫要義 上巻 東洋図書(東京)，1966 p.112
- 2) 奈良女子高師・裁縫研究会：裁縫精義 第2篇 袷及縮入篇，東洋図書(東京)，p.26
- 3) 岩松マス：和服裁縫 後編，雄鶏社(東京)，1970 p.50
- 4) 共立女子大学・山本らく他：和服裁縫全書，大日本図書(東京)，1966 p.73
- 5) 上田美枝：新和裁全書，マコー社(東京)，1969 p.68
- 6) 藤田とら：和服裁縫，光文社(東京)，1969 p.54
- 7) 土井幸代：和裁，同文書院(東京)，1969 p.124
- 8) 谷扶嵯子：立体和裁，主婦と生活社(東京)，1982 p.130
- 9) 久保房子他：和服の理論と実際，京都書院(京都) 1979 p.121
- 10) 松井和哥：和裁図鑑，暁教育図書(東京)，1974 p.60
- 11) 東京家政大学・被服平面構成研究室：被服平面構成，衣生活研究会(東京)，1986 p.60